〈特別寄稿〉

日本語における文法的複合動詞[1]の統語的特徴

李　　曝洙

要　旨

日本語の複合動詞は文法的複合動詞と語彙的複合動詞とに分けられるが、文法的複合動詞と語彙的複合動詞の性質をあわせ持っている中間的複合動詞の存在を認めざるをえない。複合動詞を「統語的複合動詞、語彙的複合動詞、中間的複合動詞」に分けているが、中間的複合動詞を特立した別のカテゴリーではなく統語的性質と語彙的性質が共に含まれているものとしてみなしている。大まかに言えば、中間的複合動詞を統語的複合動詞に入れて扱うこともできるということである。文法的複合動詞と語彙的複合動詞を区別するための下位区分として次のような設定基準を立てることができる。すなわち、grammatical component parts 挿入可能（受動、使役）性を基礎にするという基準である。この設定基準は文法的複合動詞と語彙的複合動詞を区別するのに絶対的なものではないものの、複合動詞が文法的あるいは語彙的性質を持っているかを判断するのに極めて有効な手がかりにある。中間的複合動詞の構造は文法的性質と語彙的性質とをあわせ持っており、基本的には二つの動詞の間に文法的要素の挿入が可能なものと不可能なものが存在するのである。中間的複合動詞の中で文法的な性質を持つ複合動詞は本動詞の意味から派生し、抽象化された意味をもっている反面、語彙的に結合した付加的な意味をもったもの、または一つに結合したものであると言える。文法的複合動詞の統語的特徴は文法的要素が挿入可能であり、動詞と動詞の間の結合力の弱いものである。

【キーワード】

文法的複合動詞、中間的複合動詞、語彙的複合動詞、テストフレーム、文法的要素

1．はじめに

日本語の動詞の結合には二つの方法がある。前項動詞の連用形「ます形」

と後項動詞との結合、前項動詞の「て」形と後項動詞との結合である。前者を複合動詞とし、後者を補助動詞とする。ここで取り扱おうとするのは前者の複合動詞である。最近の研究では形態的結合が一致（連用形との結合）する複合動詞の中にも文法的な違いが見られるという研究が注目を集めている。しかし、研究者によってどのような文法的違いがあるのか、どのような動詞との結合がなされているのかについては、まだ明確に論じられていないのが現状である。明らかにされていない理由はいろいろあるが、その主な理由として中間的（語彙的なものと文法的なもの）な性質の動詞が存在していることが挙げられる。実際、この中間的複合動詞の定義をするのは難しい。同じ複合動詞でも単語によるものと、文脈によるものがあるからである。筆者も複合動詞には文法的なものと語彙的なものが存在するということには同意する。そして、さらに中間的な性質の複合動詞も存在するという考え方である。李（1998）では、連用形動詞の結合には形式的に grammatical function の動詞と lexical function の動詞が存在しているという事実を明らかにした。その根拠の妥当性を検証するために、test frame を通じて文法的な性質の複合動詞（文法的複合動詞）(2) と語彙的な性質の複合動詞（語彙的複合動詞）の差異点を論じ、明確に区別したのである。しかし、本稿ではこの二つ性質をあわせ持っている中間的な複合動詞の性質のみを明らかにすることを試みたい。中間的複合動詞が存在すればどのような構造をもち、どのような意味の中間的な複合動詞があるのかを検討していきたい。

2．先行研究の検討と本稿の立場

影山（1993：74-138）と森山（1988：45-55）では、複合動詞において、文法的な語構成と語彙的な語構成とに関する category を設定している。複合動詞を文法的レベルで取り扱うべきか、語彙的レベルで取り扱うべきかという問題は長い間、研究の対象になってきたのである。文法的な複合動詞は語彙的な複合動詞とは異なり、文法構造の中で最も代表的な複合動詞 (3) であると言える。文法的複合動詞は語彙的な意味が一つに限定されず、さまざまな文法的な現象が表出しているので、文法的構造が複雑である。基本的に影山は「そうする」という文法的項目を入れ替えることが可能であるか、不可能であるかを手がかりとして用いている。「そうする」を代用することができれば、文法的複合動詞（「書き始める」は「そうし始める」）であり、代用が不可能であれば、語彙的複合動詞（「書き込む」は「*そうし込む」）で

あると定義している。また、主語の尊敬語表現を用いることによって、区別することができる。すなわち、「お…になる」の形が可能かどうかである。文法的複合動詞は「読み始める」の場合は、「お読みになり始める」になるが、語彙的複合動詞「飲みほす」の場合は「＊お飲みになりほす」のように不可能である。また、受け身の形が可能であるか、不可能であるかという点も問題になる。これは筆者も認めている点である。影山では受け身に限定しているが、筆者は使役も含め、文法的要素という用語で用いている。これらは構造の特徴から区別される。文法的複合動詞「書き始める」は「書かれ始める」になり、「膨らみつづける」は「膨らませつづける」になる一方、「聞き落とす」の場合は受け身「＊聞かれ落とす」も、「＊聞かせ落とす」も使うことができないのである。しかし、これらのようにはっきりと区別することが不可能なものも存在しているのである。これらは中間的複合動詞（文法的複合動詞と語彙的複合動詞にまたがっているもの）と言える。

このように分類していった結果、筆者は文法的複合動詞には［-ハジメル］［-ツヅケル］［-オエル］［-エル］［-スギル］など、語彙的複合動詞には［-イレル］［-トル］［-ヤブル］［-チラス］などが存在しており、さらに、この二つの性質をあわせ持っている中間的な性質の複合動詞が成り立つという立場である。この中間的な複合動詞には［-マクル］［-ダス］［-カケル］［-アゲル］［-アガル］［-キル］［-ツクス］などが存在する。すなわち、grammatical component parts の［受動形］の挿入された場合［悩マサレハジメル］［トナエラレハジメル］［行ワレハジメル］［感ジラレハジメル］［取リアゲラレハジメル］［売ラレハジメル］［ツタエラレハジメル］［コワサレハジメル］［フクマレウル］［注ガレハジメル］［ササヤカレハジメル］［オオワレハジメル］［ツカワレダス］［ウタレマクル］と、grammatical component parts の［使役形］が挿入された場合は［騒ガサセハジメル］［フクラマセツヅケル］［タベサセツヅケル］［共起サセウル］［フルワセハジメル］のように文法的要素が挿入されたのをみても grammatical compound verbs で構成されていることがはっきりと分かるのである。

3．複合動詞の分類と特徴

3．1　文法的複合動詞の分類基準

文法的複合動詞になる可能性がある動詞は生産性の高い（前項動詞の頻度が高いものと文法的な働きをするもの）動詞である。後項動詞の意味が本動

詞の意味をそのまま維持しており、前項動詞と後項動詞の間の結合力が緩いものである。すなわち、「(ら) れる」「(さ) せる」という文法的要素の挿入による文法的性質がある。言い換えれば、二つの動詞の間の結合関係が緩いということが分かる。

(1) 関節の痛みと不眠に悩まされはじめた。(日本沈没・上)
(2) 山間にエンジンの音と、蜂のようなうなりをこだまさせはじめた。(日本沈没・上)
(3) じゃあ、あしたは尚人に謝らなきゃ。「ん？」薫ね、星野さんにひかれはじめてるのは事実なのよ。尚人、わかんなかった？　わかんねーよ。冗談だろ。(101)
(4) けれど、同時に押されどきでもあるはずなのだが、薫からは連絡がないのだ。それをみすかしたように、純平は言った。風船だって、膨らませつづけないとしぼんじまうだろ。(101)
(5) 推量系の判断ムードの表現形式を共起させうる。(日本語)

(1)～(5) は動詞と動詞の間の緩い場合を統語的複合動詞と言う。(1)～(5) の共通的な特徴は、後項動詞の意味が抽象化されておらず、本動詞としての意味と同じように透明な literal meanings をそのままもっていることである。それに加えて、生産性が高いのが共通的な特徴であると言える。また、(5) の「ウル」以外は aspect 的意味を持っていることも共通した現象である。このように、文法的複合動詞は前項動詞または後項動詞が付属的(接頭辞的、接尾辞的) な役割として使われておらず、文法的性質として使われている場合である。前項動詞が「なやむ、だます、ひく、ふくらむ、共起する」のように抽象的な性質を持っているものが多いと言える。

3.2 中間的複合動詞の分類基準

同一の後項動詞において、前項動詞との間に結合力が緩い場合と強い場合とを同時に持っているものがある。同一の後項動詞でもこのように grammatical な性質で構成されたものと lexical な性質で構成されたものとをあわせ持っている両用可能の中間的複合動詞(4)を別に設定する必要が生じるのである。

（6）つまり宮地さんは、横川あたりからここまで僕と同じ道を逃げて来たことになる。僕らは地方専売局の方に向かって歩いて行った。破壊され尽くした屋敷街である。電線が切れて縄のれんのようにすれ下がり、瓦や建具などで道を埋め尽くしている。(黒)
（7）時々私に憐れむような視線を送るのだった。私が訳の分からない不安に苛まれ出したのは、まさにそのためだった。(われら)
（8）クーラーで冷やされ切った身体のまま直射日光を浴びなければならぬ不快感（来）
（9）お互いに争い、糾し、揉み合い痛めつけ合った五、六ヵ月の間に、我々は自らが自らを律すると言うのがどういうことかを次第に学んでいったのだった。(われら)

以上のように、同じ後項動詞でも lexical で構成された性質があるものと grammatical で構成された性質があるものが確認された。これらが文法的に構成された複合動詞の共通点は、前項動詞と後項動詞との結合力が緩いため grammatical component parts の挿入が可能であり、（6）～（8）まではアスペクトの意味を持っていることが確認できる。なお、（9）の「アウ」はアスペクトの意味はないが、複数の動詞の結合である verb sequence が可能である。語彙的構成の動詞と動詞の間の結合力があまりにも強いので、いかなる grammatical component parts の挿入も不可能であり、後項動詞に aspect 的意味がなく、動詞本来の意味のまま使われているのが共通点である。すなわち、本動詞そのままの意味である［指向］の［-カケル］、［移動］の［-ダス］、［切断］の［-キル］は語彙的性質が強い反面、本動詞の意味から抽象化された不完全［開始］aspect の［-カケル］、［開始］aspect の［-ダス］、［完遂］aspect の［-キル］は文法的複合動詞であると言える。よって、これらは文法的性質と語彙的性質をあわせ持った中間的複合動詞である。誤解しやすい複合動詞としては「もたれかかる」のようなものがある。たとえば、「チェロを椅子の背にもたれかからせて、ステージの前方に出ていく」、「犬は花のあいだをかけまわりだし、私は木柵にもたれかかる」などの例文の中の「もたれかかる」は「よりかかる、他のものに頼る」という意味であり、ひとかたまりの複合動詞が存在しているのである。あるいは、物や人に体などをよせて体重をかけるという意味の「もたれる」に「かかる」が組み合わさったものと見ることができる。ここで問題になるのは「もたせかける」のような

ものである。これを「もたせる」と「かける」との組み合わせとして扱うべきか、「もたれる」に「使役」の意味が入った「もたせる」と「かける」が組み合わさったものとするべきかはっきりと認識できないものも存在する。たとえば、「寝惚け眼にも上体を壁にもたせかけている古竹を抱き抱えようと膝で歩いて近づいて行った」、「頭をうしろにそらして椅子にもたせかけてやり、鼻血を出させた子供には拳で何発なぐりかかった後、教壇の上に手をあげて正座させた」のような複合動詞は曖昧である。したがって、このように文法的複合動詞と語彙的複合動詞の区別が不明確なものはここでは取り扱わないことにする。

3．3　語彙的複合動詞の分類基準

語彙的複合動詞とは、二つの動詞が結合され固まったfused verbsになったものであり、後項動詞の生産性が高いものと低いものが存在しているが、両者とも動詞が語彙化（lexicalize）された形態的緊密性がうかがえる。二つの動詞の間にいかなる文法形態をも入り込まないということはその二つの動詞の結合関係があまりにも強いためであり、文法的自由を失う点が特徴である。

(10) 学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止まった。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きくかいてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。(窓際のトットちゃん)

(11) 思わぬ敵に出くわして、逃げ込みたいようにも見えた。(友情)

(12) 同じ銀の世界のものとして受け取られたと思います。(日本人と日本文化)

(13) 私の変装を見破ったのは先生がはじめてですぞ（ブン）

(14) 数日が過ぎた。街路樹の落葉を寒い風が吹き散らしている。黒い雲が、夕空にしきりに動いていた。耳をすましたら、その雲の動く音が聞こえてくるかもしれない。(愛情)

(10)～(14) のように、後項動詞と前項動詞との結合関係は密接であると言える。また、[-トマル] [-コム] [-トル] [-ヤブル] [-チラス] をはじめ、

その他の後項動詞［-カエル］、［-コロブ］など生産性が極めて低いものが多い。つまり、語彙的複合動詞は生産性が低いのが特徴である。また、［受ケ持ツ］の［-モツ］、［飲ミホス］の［-ホス］、［生マレソダツ］の［-ソダツ］、［売リ歩ク］の［-アルク］、［泣キカナシム］の［-カナシム］、［静マリカエル］の［-カエル］などのようにさまざまな動詞に及ぶ。語彙的複合動詞は fused verbs あるいは idiomatic verbs で構成された複合動詞が多く存在している。また、［持チハコブ］の［-ハコブ］は［ものをもって外のところへ運ぶ］という意味で、後項動詞としてはほとんど使われない反面、［運ビダス］、［運ビコム］のように前項動詞としてより多く使われる。語彙的複合動詞は意味の関係と語構成とを関連させたものが多いのである。

以上から分かるように、Renyookei forms に動詞を結合したとき、大きく grammatical 的性質の文法的複合動詞と語彙的性質の fused verbs された（結合力の強い）語彙的複合動詞があるという事実が確認できた。文法的複合動詞は二つの動詞の間の結合力が緩く、後項動詞の意味が本動詞の意味をそのまま維持しており、aspect 的意味を持っているのが特徴である。その反面、中間的複合動詞は文法的複合動詞と語彙的複合動詞の性質をあわせ持っているものである。この中間的複合動詞は同一の複合動詞でも前項動詞の性質により語彙的性質なのか、統語的性質なのかの区別が可能である。このように lexical な性質で構成された複合動詞の大部分は前項に現れる動詞がかなり限定されており、後項動詞に文法的性質があまりないので grammatical component parts の［受動形］の挿入などは一層不可能になる。複合動詞を語彙的、文法的という境界線を引いて分けるには曖昧な場合があるのも否めない。文法的性質と語彙的性質の相互関係（correlation）に分けて調査するべきであり、複合動詞の意味の究明においても文法的複合動詞と語彙的複合動詞、中間的複合動詞の性質を理解した上で分類すれば明らかになるのであろう。これらを基本として一つ一つの複合動詞の性質を明らかにするのがなにより重要な意味を持つのである。

4．文法的複合動詞と語彙的複合動詞のカテゴリー

4．1　文法的要素の挿入

前項動詞に受動形が挿入されたものは統語的性質の複合動詞と認められる。しかし、後項動詞に受動形が挿入されたものは、統語的性質の複合動詞であるとは認めがたい。影山（1993：143-151）では「投函し忘れられた手紙」

のように後項動詞の受動形も統語的性質とみなしている。しかし、筆者は補文構造の成立や後項動詞の受動形などを影山の主張どおり文法的性質とみなすことは妥当でないと考えている。その理由としては二つの動詞と動詞の間の結合が緩くなく、また前項動詞を受動形や使役形として使うことができないからである。すなわち、文法的複合動詞においては語彙的複合動詞には見られない文法的要素の挿入現象が起こらないからである。

4.1.1 grammatical な性質の複合動詞

文法的性質の複合動詞とは、「(ら) れる」「(さ) せる」という文法的要素の挿入(6)によりその性質が現れるものである。すなわち、一つの語彙として結合した性質の動詞でなく、二つの動詞と動詞の間の結合が緩いということ、つまり、文法的に構成されたもののことである。

(15) 「聞いてます。聞いてます。でもさ、そんなこと言ってると、人生マシンガンだらけだと思うよ。マシンガンで打たれまくって、地雷ふまれまくって……そいでも、みんなどうにか、生きてくわけさ。少なくとも私はね。(Long Vacation)

(16) こっちだってふまれまくり。だいたい、おれは人に干渉されるのが、大嫌いなの。なのになんで…男に逃げられた30女と一緒にいなきゃいけないんだよ。(Long Vacation)

(17) それを雨あられのように浴びせかけられ、子供の頭はどうかしてしまう（日本語の個性）

(18) 荷物を欄干に載せかけて、恐る恐るそのむくろに近づいてみると、口や鼻からうじ虫がぽろぽろ転がり落ちている。(黒い雨)

(19) 「さ、行こうぜ。ぐずぐずしていると、また管理室から苦情言われちゃうから」
「うん…」腰を浮かせかけた薫は、そのままの姿勢で、客席のほうを見つめた。(101回目のプロポーズ)

(20) そこで注目され出したのが語尾の豊かな関西弁というわけだ。(日本語の個性)

(21) 大宮は方々から原稿を頼まれ出したせいもあって書斎にこもっている時が多かった。(友情)

(22) 欧米市場が好況期をむかえたし、アフリカ諸国の開発が軌道に乗り

だし、世界的に船舶不足です。半年先の契約も、新造船はもちろん、トランバーまで狩り出されかけています。
おまけに、撤退は、おそらくかなりの混乱と危機の中で行われることになる。と首相はつぶやいた。(日本沈没・下)

(15)～(22) のように「マクル、ダス、カケル」などは本動詞としても生産性が比較的高い動詞である。これらが複合動詞として使われても本動詞の語彙的特性にいかなる影響をも及ぼさないと言える。また、これらの後項動詞が受動形になるのではなく、前項動詞が受動形になっている。ここで重要なのは数は多くないが、後項動詞がそのままの動詞の性質を持ったままで、以下のように語彙的な用法にも制限されて使われていることである。たとえば、「かける」「かかる」「だす」は本動詞のプロトタイプ的意味ではなく、抽象化された「開始」のアスペクトの意味が入っており、「きる」「つくす」は「完遂」のアスペクトの意味が入っている。すなわち、アスペクトの意味を持つものと文法的性質のあるものとが一致しているのである。また、「まくる」の場合は本動詞の基本的意味と異なり、抽象化された強調の意味を持っている。

4.1.2 lexical な性質の複合動詞

lexical な性質の複合動詞とは、4.1.1で述べた後項動詞と同様に複合動詞であるが、文法的性質がないものであり、「(ら) れる」「(さ) せる」という文法的要素の挿入が不可能なものである。すなわち、一つの語彙として結合した性質の動詞であると言える。

(23) そこで力の限り人を押しのけ突きのけて行くと、後から押しまくられて固いものに突き当たった。(黒い雨)
(24) 風向きが変ったのか、ひとかたまりの火が吹きまくられて中ほどからふくれあがり、紡錘形から玉形の火のたまになって空に舞い上がった。(黒い雨)
(25) 爆風にふきまくられて空に舞い上がり、焼けて軟らかくなったものが風に揉まれながら丸くなって落ちて来たらしい。(黒い雨)
(26) 客の横へ来て、べらべらとしゃべりまくるのである。(愛情のかなしみ)

(27) 北原は、鼻の穴から、タバコのけむりを吐き出した。(愛情のかなしみ)

(28) 黒人兵がズボンをずりさげ黒く光る尻を突き出して、ほとんど交尾する犬のような姿勢で小さな樽を木片でかきまわして、黒人兵の消化、特に下痢の状態を説明した。(飼育)

(29) 薫は、海に向かって、ふっとほほえみかけた。(101回目のプロポーズ)

(30) 「その方が、コンクール通りやすいって」言い切る貴子に、瀬名は言葉につまってしまった。(Long Vacation)

(31) どうしたのだろうな、どこかが、ひっかかっていて思うままにならない。(死者の奢り)

(23)～(31) のように、一つに固まった語彙としてみなされているので語彙的複合動詞に近い。二つの動詞を分離すると意味が不明確になるとともに、または本来の意味と異なる意味になる。この二つの動詞と動詞の間にはいかなる性質の文法的要素の挿入も不可能である。したがって、これらは語彙的性質の複合動詞であると言える。

以上のように (15)～(22) と (23)～(31) は後項動詞が同一であるが、前者は文法的な性質の複合動詞であり、後者は語彙的な性質の複合動詞である。すなわち、前者は文法的複合動詞と同一の性質をもってはいないが、広い意味で文法的性質を持つ複合動詞と言える。grammatical component parts (受動、使役) の挿入が可能であり、また aspect 的意味をもっているなど不完全でありながら文法的複合動詞に近い。しかし、後者の複合動詞の性質は同一の後項動詞であっても完全に結合した語彙的複合動詞に近いと言える。

5. 終わりに

前項動詞の連用形と後項動詞と結合した複合動詞において、文法的性質として構成されたのか、語彙的性質として構成されたのかの設定基準と下位区分を中心に調査してきた。その結果、明らかになった事実を整理してみると以下のようになる。

まず、複合動詞は文法的複合動詞と語彙的複合動詞とに分けられる。その中に中間的複合動詞が存在している。すなわち、文法的複合動詞と語彙的複合動詞の性質をあわせ持っている中間的複合動詞の存在を認めざるをえな

い。影山（1993）では複合動詞を「統語的複合動詞と語彙的複合動詞」に分けており、森山（1987）では「統語的複合動詞、語彙的複合動詞、中間的複合動詞」を単語レベルから分けている。筆者も基本的には森山の分け方に同じ分類である。すなわち、複合動詞を「統語的複合動詞、語彙的複合動詞、中間的複合動詞」に分けているが、中間的複合動詞を特立した別のカテゴリーではなく統語的性質と語彙的性質が共に含まれているものとしてみなしている。大まかに言えば、中間的複合動詞を統語的複合動詞に入れて扱うこともできるということである。

ここでは、文法的複合動詞と語彙的複合動詞を区別するための下位区分として次のような設定基準を立てることができる。すなわち、grammatical component parts 挿入可能（受動、使役）性を基礎にするという基準である。この設定基準は文法的複合動詞と語彙的複合動詞を区別するのに絶対的なものではないものの、複合動詞が文法的あるいは語彙的性質を持っているかを判断するのに極めて有効な手がかりにある。中間的複合動詞の構造は文法的性質と語彙的性質とをあわせ持っており、基本的には二つの動詞の間に文法的要素の挿入が可能なものと不可能なものが存在するのである。中間的複合動詞の中で文法的な性質を持つ複合動詞は本動詞の意味から派生し、抽象化された意味をもっている反面、語彙的に結合した付加的な意味をもったもの、または一つに結合したものであると言える。

以上のように、文法的な複合動詞と語彙的な複合動詞の分類法はいままでの複合動詞研究においては同一なもののように取り扱われてきたが、複合動詞の中には文法性の強いものと語彙性の強いものがあるのである。また、文法性と語彙性の二つの面をあわせ持っている（両用可能なもの）ものも存在するという事実が明らかになった。その違いを明確に区別するために、文法的要素が挿入可能であるか、test frame を設定して適用させた結果、動詞と動詞の間の結合力の強弱などが lexical 的性質を持っているのか、grammatical 的性質をもっているのかの重要な手がかりとなる。上の基準は複合動詞における後項動詞の性質を明らかにするのに極めて有益なストラテジーであると考えられる。

注

（1）最近、複合動詞の新しい研究の流れとして注目を浴びているのは複合動詞を認知文法論として取り扱っている山梨（1995：101-110）の研究である。そこでは、本動詞「出す」と複合動詞「-出す」との関係を容器性と複合動詞の拡張表現として扱っている。

（2）李（1998）では文法的な複合動詞を完全なものと不完全なものに分け、区別している。また、test frame としては、① grammatical component parts の挿入の可能性、② alienable の可能性、③ paraphrase の可能性、④ verb sequence の可能性、⑤ aspect の意味の有無の可能性を手がかりとして分けている。

（3）ここで言う文法的複合動詞とは、森山と影山の言う統語的複合動詞と同様のものである。この名称は獨協大学の城田俊氏の助言によって付けられたものである。統語的複合動詞を文法的複合動詞として取り扱うのは本稿のみであろう。

（4）文法的複合動詞「食べ始める」と語彙的複合動詞「飲みほす」を見ても後者より前者の方が複合動詞の姿を表している。

（5）影山（1993：96）では「返事し遅れる、運転しなれる、墜落しかける、印刷しだす」などを統語的複合動詞として認めているが、これらの基準が明確でない、さらに統語的複合動詞を始動、継続、完了、未遂、過剰行為、再試行、習慣、相互行為、可能に分けている。これらの中で test frame にあてはまるものはそれほど多くない。

（6）（17）、（18）、（19）、（22）の複合動詞は文法的複合動詞として判断しがたいと言われているが、筆者は可能性として語彙的複合動詞より文法的複合動詞に近いという考えである。

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』 pp.74-138.

斉藤倫明（1993）『現代日本語の語構成論的研究』 pp.231-249.

柴谷方良（1993）『言語の構造』 くろしお出版　pp.45-59.

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院　pp.45-55.

仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院　pp.116-145.

寺田裕子（2001）『日本語教育』89　日本語教育学会　pp.20-29.

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房　pp.11-26.

山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房　pp.101-110.

李　曝洙（1996）「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究－本動詞との関連を中心に－」『日本語教育』89　日本語教育学会　pp.76-87.

李　曝洙（1997a）「現代朝鮮語の複合動詞について」『朝鮮学報』162　朝鮮学会　pp.61-97.

李　曝洙（1997b）「中間的複合動詞の意味用法の記述」『世界の日本語教育』7　国際交流基金　pp.219-231.

李　曝洙（1998）「現代日本語の文法的複合動詞の条件と周辺」『日語日文学研究』33　日語日文学会　pp.37-65.

李　曝洙（2001）「本動詞と複合動詞の関連性に関する研究」『日語日文学研究』39　韓国日語日文学会　pp.317-333.

李　曝洙（2003）「日本語複合動詞の多義構造」『日語日文学研究』47　韓国日語日文学会　pp.57-75.

Kageyama, T. (1984) "Three Types of Word Formation" Nebulae 10, Osaka Gaidai pp. 16-30.

Miller, G. D. (1993) Complex Verb Formation, John Benjamins Publishing.

Tsujimura N (1999) Japanese Linguistics, Blackwell pp. 297-325.

Susumu Kuno (1993) The Structure of the Japanese Language pp. 3-34.

Shibatani, M. (1990) "Word Formation", The Language of Japan, Cambridge University Press pp. 215-256.

用例出典

芥川龍之介（1989）『杜子春』新潮文庫
大江健三郎（1959）『飼育』新潮文庫
井上　靖（1965）『敦煌』新潮社
梅棹忠夫（1969）『知的生産の技術』岩波新書
井伏鱒二（1970）『黒い雨』新潮文庫
黒柳徹子（1984）『窓際のトットちゃん』講談社
源氏鶏太（1970）『愛情の悲しみ』角川文庫
小松左京（1983）『日本沈没』徳間文庫
司馬遼太郎（1972）『日本人と日本文化』中央新書
松本清張（1972）『目の壁』新潮文庫
野嶋伸司（1991）『101回目のプロポーズ』角川文庫
北川悦吏子（1996）『Long Vacation』角川書店
長谷川勝行（1994）『日本人のひみつ』YAC 企画

リ・ギョンス
（韓国放送通信大学校日本学科助教授）